

19. カラスの不妊化試験

遠竹行俊

〔目的〕

都市部でのカラス被害は依然多く、春先から初夏にかけての相談件数は窓口業務の障害にさえなっている。問題となったカラスは、銃器の使用や捕獲檻の使用に制約を受けるかわらで、市街地に溢れる生ゴミやドバトを食料源に繁殖を繰り返している。カラス被害の相談が繁殖期に集中していることから、また、カラスは本来都市部には今日ほどの大羽数でいなかったはずであり、一般の野鳥とは違った方法で個体数の調整を検討するために不妊化の可能性について試験した。

〔方法〕

有害駆除や狩猟期間中に捕獲したカラスを禽舎（1区画が約4.05㎡、D4.5m × W0.9m × H2m）で飼育観察した。また、複数飼育の場合適宜区画数を変更した。供試羽数は延べ60羽であるが、このなかの30羽は飼育途中で呼吸器系と思われる病気のためや飢餓試験のため落鳥した。餌はドッグフードを3～4日分ずつ与え個体毎の様子を観察した。

〔結果〕

飼育中の個体は、一昨年結果からも明らかなようにほとんどが前年に孵化した1歳未満のカラスであり、体重も昨年同様雌が約650g（最大700g～最小600g）、雄が約750g（最大800g～最小700g）となった。

採食量は、昨年の場合1日1羽当たり約40gであったのと同じ、1日1羽当たり約100gとなった。これは飼育密度が、昨年4区画分連続の部屋に約6～10羽であったのに今年は、最大で4区画分連続の部屋に約4羽、他の個体は全て1羽であったためと考えられる。また、1羽飼いの区画（20区画）では若干の個体差がみられ、日によって1～2割ほど食べ残すことがあった。

生殖器の発育状態は、昨年3月下旬においても未発達で、繁殖に参加しない未成熟の個体ばかりだったが、今年の解剖の結果4月下旬には卵巣と精巣が発育を開始していた（写真）。ただし、本来野性のカラスが禽舎内で産卵した例は無いので、飼育下の繁殖生理は解剖によって観察を続けるのが最も簡便な方法と思われる。

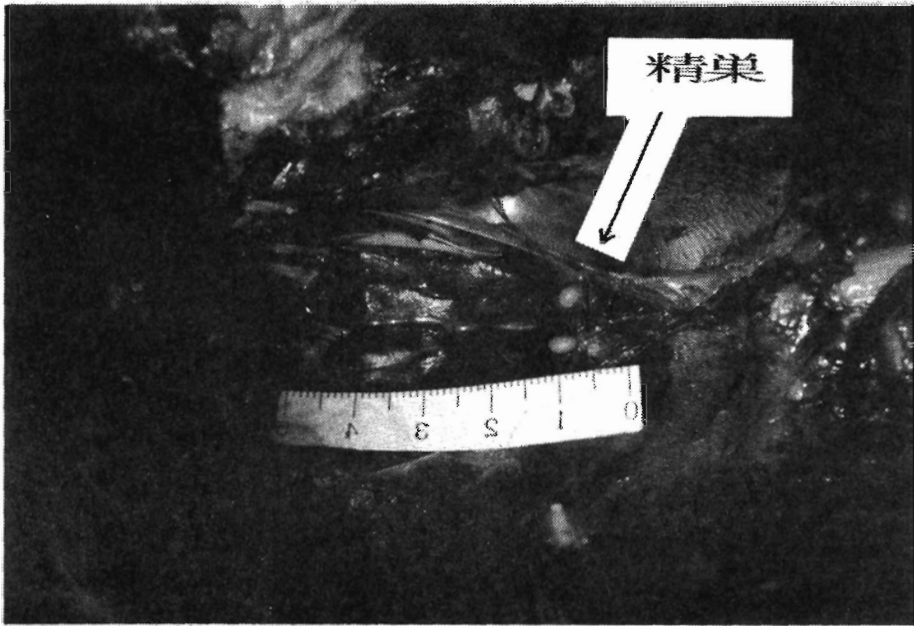


写真-1. 発育を開始した精巣 (4月下旬)
4 mm×2.5 mmの淡黄色をしている

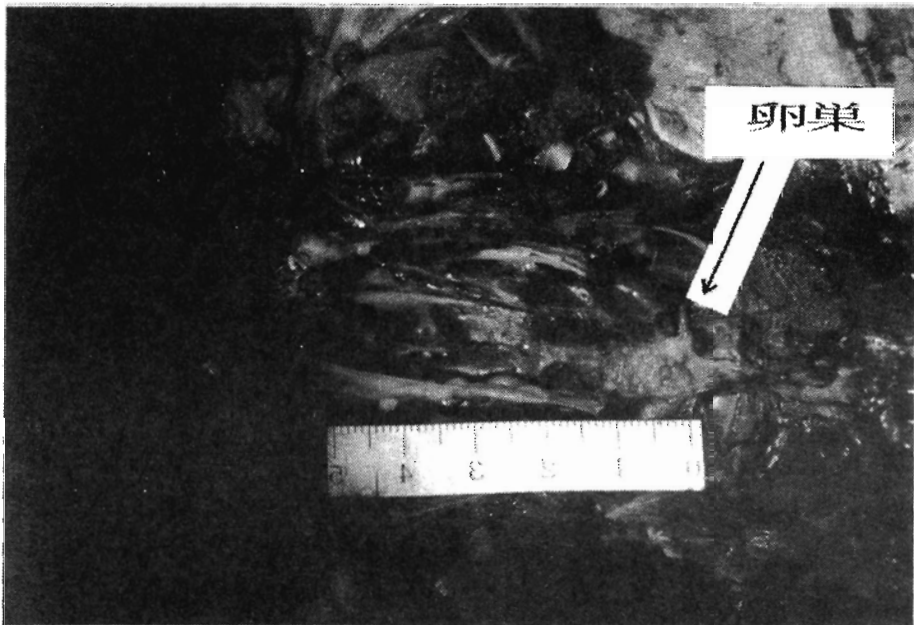


写真-2. 発育を開始した卵巢 (4月下旬)
直径約2 mmの卵胞が見える